

守住。总之，如果不讲制度创新，少数民族就会成为发展或进步的牺牲品。中国改革开放之前，国家在少数民族地区办了很多“两场”，就是国营农场和国营林场。改革开放之后，又办了很多“两区”，即经济开发区和生态保护区。民族地区出现生态危机时，国家又要想办法做生态移民，总之会造成各种各样的赤字。

那我们还有什么希望？希望还在于历史和人性。两千多年来，那么多有雄心的人想把少数民族做没也做不成。昨天政治组的几个老师讨论时也讲到，大家对目前这种处境都感到不舒服。只要大家感到不舒服，人类就有希望。

最后讲我们面临的机遇。再过三年，中国就要纪念辛亥革命 100 周年了。那辛亥革命是中国农民问题和少数民族问题的起点。我们要学习中国做

农村研究的人，举全中国和全东亚之力，举全体少数民族研究学人之力，来做这方面的创新研究，做出能让领导层做正确决策的文件来。我们要做政策和形势分析报告，指出在这个领域拖延改革的社会政治风险。我们要用文化生态学来凝聚社会共识，倡导两个保护和一个维护：即保护生态环境，保护传统文化，维护弱势群体和少数民族权益。对于学界，我们要倡导从社会发展史到文化生态学的研究范式，直到把它推广成和谐社会的哲学观。

最后我说十六个字：“高山仰止，景行行止，虽不能至，心向往之！”谢谢！

○座長 谢谢张海洋教授激情澎湃的讲演，今天时间有限，希望以后有机会继续探讨。下面请山下教授发言。

「観光開発と世界遺産－中国雲南省麗江を訪ねて－」 山下晋司（東京大学）

ご紹介いただきました東京大学の山下でございます。私は中国に関してはまったくの門外漢です。私には中国に関する知識がほとんどありません。ですが、シンポジウムにお招きいただきましてありがとうございます。国際中国学研究センターに深く感謝申し上げます。門外漢ながらシンポジウムの熱い議論を楽しんでおります。

私の報告のタイトルは、「観光開発と世界遺産－中国雲南省麗江を訪ねて－」です。今年の7月に雲南省麗江を訪れる機会がございましたので、それについてご報告したいと思います。

これまで私は文化人類学の立場から観光を研究してきました。インドネシアやマレーシアなど、東南アジアがフィールドです。約 10 年前になりますが、『バリ－観光人類学のレッスン』（東京大学出版会、1999 年）という本を出しました。その後、2002 年から 2007 年にかけて、「資源人類学」という科学研究費の特定領域研究プロジェクト（代表内堀基光放送大学教授）に参加しました。その結果は、資源人類学講座の 1 冊として、『資源化する文化』（弘文堂、2007 年）という本にまとめました。また、『観光人類学の挑戦－「新しい地球」の生き方』という新しい本が 2009 年 1

月に講談社から出ることになっています。その本のなかでも、今日お話しする麗江のことについて触れております。

さて、方さんは「人文資源」という言葉をお使いになりましたが、先ほどから文化資源という言葉が使われています。資源と言うと、普通は石油や森林、水など、自然資源の意味で使われることが多いのですが、文化を資源としてとらえようという考え方が最近出てきているわけですね。最近と言っても決して新しいというわけではありません。例えば、ユネスコの世界遺産などは 1972 年にスタートしており、そのなかでは文化遺産というかたちで文化を資源としてとらえているわけですね。2000 年には文化資源学会ができ、研究も少しずつ展開されています。

自然資源もそうですが、資源とは何かそこにあるというわけではなく、資源になるという側面が重要です。エリック・ジンマーマン（Erich W. Zimmerman）は、1933 年に *World Resources and Industries*（世界の資源と産業）という本を書きましたが、そのなかで資源というものは、ある条件のなかで「資源になる」

(resources become)と言っています。

例えば、石油にしても、テクノロジーがあつて石油資源になるのであつて、それがなければ資源にならないわけです。それは文化でも同じです。では、どのような条件で文化は資源になるのか。その条件を問うことが重要になるかと思ひます。

先述の『資源化する文化』のなかでは、森山工さん（東京大学）が「資源であること」と「資源になること」を区別して、酸素の例を挙げて説明しています。酸素は、人間が生きていくうえで必要な生存資源ですが、最近、酸素バーというものがあります。これは「いい酸素」を吸ってリラックスするというものです。こうして、われわれが無意識のうちに吸っている酸素と、酸素バーの酸素では、同じ酸素でも資源としてのあり方が違うわけですね。前者は生存のための「資源である」酸素ですが、後者はリラックスのために「資源となった」酸素です。そう考えると、「資源になる」とときには、もともとのコンテクストとは違った使われ方をするとということが重要なのです。

観光のコンテクストでは、文化がもとのコンテクストとは別のコンテクストにおいて使われます。先ほどの方先生の報告では、農民文化が無形文化として、今、中国で注目されているようですが、農民文化を農民ではなく、都市民が味わったり、工業社会で農民文化を使うということが観光のコンテクストでは重要になるわけです。そのダイナミクスを検討することが、観光における文化資源の研究ということになるかと思ひます。

さて、世界遺産ですが、世界遺産の数という点では、中国は、イタリア、スペインに続き世界第3位の世界遺産大国で、世界遺産サイトが37もあります。そのうち文化遺産は26ヶ所。ここで取り上げる麗江は、1997年に世界遺産（文化遺産）に登録されました。

他方、中国は、観光大国でもあります。さきほどいただいた愛知大学現代中国学会の『中国21』（Vol. 29, 2008年3月号）で観光特集がおこなわれています。これをみますと、中国に来る観光客（inbound）は、2006年には約5,000万人に達しています。これはフランス、スペイン、アメリカについて世界第4位です。そして2020年には約1億4,000万人の外国人観光客を受け入れる

受入国世界1位になるという世界観光機関の予測があります。

出るほう（outbound）も、2006年に約3,500万人。2020年までには1億人に達し、世界4位の送出国になると予想されています。2年前に、イギリスのリーズで観光に関する会議がありましたが、“Chinese are coming”と大騒ぎでした。

いずれにしても、中国をめぐる国際観光はこんにち活発に展開されています。国内観光にいたっては延べ13億人を超えていることで非常にたくさんの方が旅行しています。昨日来、世界の工場としての中国が問題になっていますが、世界の観光ハブとしての中国がまもなく前面に出て来ると思ひます。

さて、今日の私の報告の焦点は、雲南省の麗江です。張先生が、さきほど非常に熱く少数民族のことを語っておられましたが、麗江は少数民族ナシ族のホームグラウンドです。この麗江の古城が、先述のように、1997年に世界遺産に登録されました。江沢民主席の時代で、古城の入口には「世界遺産麗江古城 江沢民」という文字が刻まれています。

麗江が世界遺産になると、観光客が激増しました。麗江市の観光局の方に向かっていたころでは、観光客は1996年の106万人から2007年には433万人に増え、2008年は500万人を超えるだろうということです。観光客の多くは、中国国内各地からのドメスティック・ツーリストだと思ひます。私が訪れたのは7月でしたから、夏休みの季節で、麗江古城は多くの観光客でごった返していました。古城の入場料は80元、結構高い額を徴収しています。経済的には2007年の麗江市の観光収入は47億元あるということでした。昨日から文化の経済化ということが問題になっていますが、その点で観光は大きな役割を担っています。

では、こうした観光の展開のなかで何が起きているのか。大勢の観光客の到来とともに、まず麗江古城の人々の暮らしを支えてきた水路は汚れ、「保護民居」は住宅からゲストハウスやおみやげ屋、レストランにかわりました。そうしたなかで、麗江の住民であるナシ族が麗江古城から出て行き、古城の住民の多くはよそ者にとってかわられました。古城はいまや観光客のために存在す

るようになっているのです。

こうした現状をみて、北海道大学の山村高淑さんなどは、『世界遺産と地域振興—中国雲南省麗江に暮らす—』（世界思想社、2007年）という本のなかで、「世界遺産なんて要らない」とさえ述べています。

私が麗江を訪れたときに、あるナシ族の方にお目にかかることができました。その方は、「保護民居」のなかで民宿をやっています。彼は、麗江にいろいろな人が来ることはよいことだとポジティブに考えていました。彼の奥さんは白族ですし、息子のお嫁さんは漢族です。いろいろな交流のなかでナシ族の文化があり、歴史的に見れば、ナシ族の文化自体が一種の混血文化（クレオール文化）なのです。私が研究しているインドネシアのバリもそうですが、伝統的な文化が昔からあるという考え方は間違いです。伝統文化とは、常に現在の状況のなかで再生産されていくものでしかないのです。

こういうわけで、私は伝統文化をたんに保存するという立場には与しません。保存しようとしても保存しきれないものです。文化は常に変わっていくものであると思っています。

ですから、「保護民居」の住人が必ずしもナシ族でなければならないとは私は考えていません。また、もし麗江古城が世界遺産ということであれば、遺産はまさに世界に開かれてあるべきです。遺産というものは保存することによってではなく、交流のなかで立ち上がり、意味を持つてくるのだと思っています。

先ほど張先生が「開発の主体」ということをおっしゃいましたが、世界遺産という文化資源を考える場合、一番の問題は、「誰が、何を、何のために、誰のために」資源化していくかということです。特に「誰が」という主体の問題は非常に複雑です。世界遺産麗江古城の場合、主体は、麗江の地域住民なのでしょうか、中国政府なのでしょうか、それともユネスコなのでしょうか。資源化にはいろいろなレベルがあり、どのレベルで考えていくべきかは単純ではありません。

私の考えでは、ローカルな文化は、ナショナル、さらにはグローバルな視野の相互作用のなかで作られます。張先生流に言うと、古代と現代、国

内と国外、その巨大な視野から考えなければいけないということです。このことは『資源化する文化』のなかで葛野浩昭さん（立教大学）が、文化の資源化は「ローカルかつグローバル、過去遡及的かつ未来志向」な視野のなかで行われなければならないと指摘していることと繋がっています。いずれにせよ、そのような大きなパースペクティブのなかで文化資源の問題を考える必要があるのです。

さらに、世界遺産が観光というコンテキストにおいて少数民族にとってある程度の経済的な基盤を与えるものであるとすると、そこから自らを主張していくアイデンティティの政治学もあるかと思います。テッサ・モーリス＝スズキ (Tessa Morris-Suzuki) が、『批判的想像力のために』（平凡社、2002年）という本のなかで、オーストラリアの多文化主義社会を念頭に置きつつ、「1人1票とか富の再配分だけが民主主義ではない。いかに文化資源を獲得して表現するか、さらには、その文化資源をいかに文化資本に転換していくかが現在の民主主義なのである」と語っています。

そうだとすれば、多民族・多文化国家中国の民主主義はどうなのでしょう。それは「和諧社会」とどのように関係するのでしょうか。興味深い論点だと思います。

この点で最後に、「1つの世界にともに生きることを学ぶ」という言葉について触れておきます。これは、アメリカの文化人類学者のマーガレット・ミード (Margaret Mead) が、1944年に書こうとして書けなかった本のタイトルです。



1944年は、日本とアメリカが戦争をしている最中です。そのさなかにあつてミードは「一つの世界にともに生きることを学ぶ」ことを模索しよ

うとしました。しかし、アメリカが日本に原爆を落としたので、まだ時期尚早だとして出版しなかったのです。それから60年以上たちますが、この言葉はこんにちますます重要になっているように思えます。

この「一つの世界とともに生きることを学ぶ」ということは、「和諧社会」と関係があるのでし

ょうか。最後のスライドの左側の写真は、麗江古城の広場で、観光客とナシ族の人が輪になって踊っている様子です。これは「和諧社会」のイメージなのではないでしょうか。一つの問題提起としておきたいと思います。

○座長 谢谢山下教授！非常令人启发，印象深刻的的一个报告。接下来我们邀请上田老师发言。

「模索する雲南チベット族」

上田 信（立教大学）

今日は、このような場にお招きいただきまして、本当にありがとうございます。中国を学ぶ者として、愛知大学は非常に崇高な1つのセンター、戦前の東亜同文書院からの歴史もありますし、日々、私が史料を読むときに恩恵を受けている『中日大辞典』も愛知大学のものですから、かねがね愛知大学にはいつかはと思いながら、今日、初めて呼ばれて参りました。この機会を与えられたことを感謝申し上げたいと思います。

私は歴史をやっております。歴史とは、いつ、どこで、誰が、何をしたというところから入っていきますので、非常に具体的なところから話を立ち上げていきたいと思います。

今日の話題の中心は、雲南省の西北部の、かつて中甸県と言っていたところで、現在は、香格里拉（シャングリラ）県と名前を改めています。場所は、先ほど話に出ました麗江の隣になります。今は高速道路等ができて道もよくなり、速く行けるようになりましたので、おそらく車で3時間から4時間程度でたどり着けるかと思えます。

私自身、2004年に1年間、昆明で生活していたときに、しばしばここには行きました。ちょうど観光開発が進む真ただ中の状態で、その後、2005年、2006年と、毎年、この地域を訪れてはいろいろな人から話を聞くということがありました。

実際に見ていきますと、地方政府主導の観光開発が、さまざまな問題を引き起こしていることを非常に強く感じました。先ほど生態環境の劣化ということで、麗江においても水が悪くなっている

という話がありました。ここも5つ星級のホテル等がいくつも建ち、そこから出る排水が町を流れている河川を見るからに汚しているという感じがあります。伝統的な街並みの破壊も進んでいきました。雲南で生活してみると、麗江があまりにも成功してしまったために、「麗江モデル」とでも言いましょうか、地方政府は「麗江に学べ」というかたちで観光開発をします。麗江も町の古城をどんどんと外に向けて広げていっています。古城とは言っても、古い街並み風にした地域が非常に広がっています。本来の街並みを壊して、古い街並み風のものに建て直すという動きが見られています。そのため、伝統芸能、生活文化もまた変容しています。

先ほど「主体は何か」という話がありましたが、私の今日の話題の主体は、雲南に住むチベット族です。簡単に説明しますと、雲南のチベット族は、非常に立体的な自然環境のなかで生活しています。そして、ナシ族やリス族という民族と一緒に生活しています。そのなかで、さまざまな文化的な交流をしながら、非常に豊かな文化をつくってきたことが、チベット族の1つの伝統だと思います。

ここが雲南省になります。今日のお話をするとここがこのあたりです。雲南省の西北になりますが、迪慶（Diqing）というチベット族の自治州があるところです。見ておわかりのように、非常に山あり谷ありで、谷から上までが数千メートルという標高差があります。例えば、この「シャングリラ」と書いてあるところから、2番目の話題に